

高齢者C氏・D氏の余暇活動について

—高齢者における類型化と高齢者に対する

レクリエーション援助方法の確立に向けての事例研究(2)—

○上野 幸、山崎律子、高橋和敏(余暇問題研究所)

キーワード：高齢者、余暇活動、レクリエーション、レクリエーション援助

●はじめに

本研究は第29回(1999年)大会時に発表した「高齢者A氏・B氏の余暇活動について—高齢者における余暇活動の類型化と高齢者に対するレクリエーション援助方法確立に向けての事例研究(1)—」の第2報である。

本研究の問題意識は、すでに第1報で報告したように、高齢者ケア問題への関心が高まるに従い、高齢者に対するレクリエーション援助問題もその解釈をめぐる混乱が介護の現場において起こってきたことである。一方高齢者といっても暦年齢幅は極めて大きく身体的状況・精神的状況においても大きな個人差がある。しかしながら、高齢者をひとつの枠内に入れ、画一的に対処される懸念がある。

これらの問題意識に基づき、高齢者の生活の質を現在以上に高めるには、医療的側面のみならず、レクリエーションの視点からの高齢者ケアも不可欠であるという最近の介護現場での傾向を、より発展させる契機となることを願って本研究を手がけた。

高齢者の状況を知るために、最も客観的および合理的とされる調査データを最新の解析方法を駆使して処理する方法もあるが、本研究は、克明に生の声を把握することに意義を感じて、個々の事例を収集する方法をとった。これは、研究のみを主たる業務としない機関である上、実際の業務に役立てたいという実務的な側面を重視したことと、基本に立ち帰るべきという考えによるものである。

●目的

最終研究目的達成のために、その第一段階として、C氏およびD氏の生活での考え方、余暇活動の志向と実践状況を把握し、健常者の事例として累積することを本研究の目的とした。

●使用用語の概念規定

*レクリエーション・「個人的・集団的にも、達成感・満足感があり、かつ社会的にも承認される経験(主に自由時間で)を促す環境整備(物的・質的)と働きかけ」の目的的概念を採用した。

*余暇活動・レジャー活動とほぼ同義に解した。

●対象と方法

*対象者：1)C氏(男性)、2)D氏(女性)

*面接日：C氏・・・平成12年8月9日

D氏・・・平成12年9月6日

*面接者 上野 幸、山崎律子

●結果と考察

C氏の場合

年齢： 68歳 昭和7年(1932)生まれ

性別： 男性

出生地： 東京都

- 現況：
- ・三鷹市在住 妻と89歳の実母と同居。
 - ・平成10年に会社勤務を退職(昭和61年より関連会社の社長、相談役)。
 - ・地域住区協議会役員
 - ・地域まつりの実行委員(カラオケサークルの代表として)
 - ・料理教室、パソコン教室に通う。
 - ・民謡、カラオケ、卓球サークルや市主催の体操教室、市民大学講座に参加。

人生経歴：・出生後、小学校6年生まで東京都・杉並区に育つ。

- ・昭和18年(1943)、小学校6年生の2学期から弟と2人で福島県の親戚へ縁故疎開する。
- ・疎開先の学校では、都会から来たことでいじめられるが、本人の努力で受け入れられるようになる。
- ・疎開先では、飛行場の開墾や働き手のないところでの手伝い、学校のグラウンドでの穴掘りや銃剣術など体を鍛えることが多かった。
- ・福島で高校進学。野球部に入り、第3回国民体育大会(福岡)に出場。
- ・父は銀行勤めで仙台へ転勤。土曜日に帰宅し、日曜日にもどっていた。父の銀行の野球部に誘われ、毎週仙台へ行き野球をしていた。途中で仙台に転校。
- ・大学でも野球部に所属、ダンスも習った。
- ・昭和34年(1959)、三菱系の会社に技術者として入社。野球部に入部。
- ・昭和38年(1963)、叔母の紹介でお見合い結婚し、実父母と同居する。
- ・昭和39年(1964)1月、第一子誕生、ただし翌年3月まで出張していた。
- ・出張は国内だけでなく海外(シンガポール、インド、台湾等)も多かった。
- ・土日出勤や工場に泊まりこむこともたびたびあり、会社人間だった。
- ・テニススクールに通っていて、アキレス腱を切る。
- ・昭和61年(1986) 関連会社社長に就任。
- ・仕事は親会社から流れてくるといふ雰囲気に対し、営業を自らはじめ、目標にあげた100件を達成する。それにより会社の雰囲気も変わる。
- ・社長退任後相談役をつとめる。
- ・社長就任後、右目の網膜剥離で3回手術する。その結果、右目の視力が低下する。
- ・平成10年(1998) 退職。
- ・何かやることはないかと思い、市報をみて市民大学講座や市主催の体操教室に参加するようになる。
- ・退職後は地域の中で活動していくことを決め、会社関係の人へのあいさつ状に、「しばらくはお付き合いできません」と送る。

- 信条：
- ・自分から積極的に行動して、与えられた役割を果たすよう努力する。
 - ・周囲に自ら接触してコミュニケーションをよく図り、協力していく必要がある。
 - ・グループのボスと対にやればよい。
 - ・逃げないでぶつかれば、あとは何とかできる。
 - ・できないことも努力すればどうにかなる。
 - ・なんでも基本に忠実にやりたい。

- 考察：
- ・難しいことやできないことにも果敢に挑戦し、達成しようとする前向きな考え方がある。
 - ・負けずぎらいだがとてもまじめで何事にたいしても研究熱心である。しかし、まじめ過ぎて、やや周囲から敬遠されてしまう印象もうける。
 - ・人との関わりはかなり積極的で、自分から行動して周囲を納得させてしまう。
 - ・なんでも基本に忠実にやりたい、基本からすべてできるようになりたいという思いが強く、そのため現在の趣味も必ず教室で指導者に習い、長い期間をかけているが、やり過ぎてしまうことに不安をもつ。
 - ・地域活動の中では、会社などの組織とは違いお互いの関係が希薄であったり共通理解がないことが、かなりのストレスに感じる事が多いと思われる。

D氏の場合

年齢： 75歳 大正15年（1926）6月生まれ

性別： 女性

出生地： 東京都 浅草

- 現況：
- ・中落合居住 既婚歴なし 独り住まい
 - ・59歳（昭和59年）で会社勤務を退職。
 - ・昭和45年に建てたアパートを現在も経営している。
 - ・書道を月2回、ビーズを時々習っている。
 - ・コーラスは友人から誘われることもある。
 - ・古代史などの講座にはよく参加している。
 - ・当初は旅行で知り合った友人と海外旅行に出かけていたが、ここ数年は、昨年まで開催していた体操教室で知り合った友人と年に1-2回海外旅行に行っている。

- 人生経歴：
- ・昭和20年（1945）3月10日、戦災で焼け出されるまでは浅草で育つ。
 - ・その後杉並区などの親戚の家を泊まり歩き、昭和27年に高田馬場へ移る。
 - ・昭和20年 20歳の時に結核にかかり、33歳までの13年間は結核の治療に費やす。
 - ・昭和25年頃（1950）25歳の時、結核が腎臓に転移し、腎臓の摘出手術をする。その後もう片方の腎臓も悪くするが、宗教に信心し摘出は自力で免れ、健康をとりもどす。

- ・就職をするために経理の学校へ通い、簿記を勉強する。
- ・昭和 35 年(1960) 35 歳の時、新聞の募集記事をみて社員 15 名ほどの出版社へ入社。
- ・小さな会社であったが、良くしていきたいと思った。
- ・社員旅行で海外に行くこともあったが、そのかわりに休日出勤や残業は多かった。
- ・会社人間だった。他は何もやっていなかった。
- ・昭和 54 年(1979)頃、現在の自宅を中落合に建て、実母と住み始める。
- ・59 歳で退職。実母亡くなる。
- ・退職後、勉強したいという気持ちから歴史関係の講座などに積極的に参加。
- ・遺跡を見に海外へ旅行するようになる。トルコを皮切りに、中国、モンゴル、ヨーロッパなどに出かけ、これまでに 40 回を越える旅行をしている。
- ・健康体操教室に 5 年、社交ダンスに 4 年通った。60 歳から書道を始め、ピーズ手芸、コーラス、水泳教室などは現在も続けている。
- ・平成 11 年(1999)に手首を骨折する以外は健康である。
- ・最近、遺産相続手続きや葬式の生前予約を行なう。

- 信条：
- ・戦争は良くない。2 度としてはいけない。
 - ・退職後、これからは自分のやりたいことを自由にしたい。
 - ・もっと勉強をしていきたい。
 - ・他人に迷惑をかけたくない。

- 考察：
- ・子供の頃からおとなしく病弱であったため、現在もあまり無理をしないように生活面でコントロールしている。
 - ・旅行に同行している友人やその家族に対し気遣い、大事にしている。
 - ・日々忙しきもなく、充実しているように見られる。
 - ・器用に振舞えるタイプではないが、人前に出されても自分の意見は率直に話し、芯が強い。そのため、初対面の人にはやや強いイメージがある。

●まとめ

本研究において、C 氏および D 氏の観察・面接において両者の共通することをまとめてみると次のとおりである。

- ① 少年期から青年期にかけて、戦争を体験している。
- ② 生活への前向きな姿勢をもつ。
- ③ 温厚ではあるが、芯が強く、負けず嫌いである。
- ④ 日本経済の成長期にたずさわっていて、仕事は大変な時期であったが、その中での喜びや達成感を見出していた。
- ⑤ 退職後、地域での活動に積極的に参加し、人間関係を深めようと意欲的である。特に C 氏は地域内での関わりの難しさに悩んでいるもののそこに達成感や満足感を求めているようすは前回の A 氏と共通する点が多く感じられた。